

# 浄土教における臨終の問題

——法然・親鸞を中心にして——

鍋 島 直 樹

現代人は、死をことさらに話題にすることを避けて、生を謳歌している。脚色された死を知っていても、自己の死や愛する者の死については延期して考え、死を忘れている。それだけに突然に死がふりかかると、死に対する何の準備もないために自己の足場を失い、看取る側もその事実を覆い隠してしまうことが多い。ターミナルケア(ホスピス)が叫ばれている今日、人生の最期において宗教や死の意味がクローズアップされているが、浄土教が長い歴史の中で、臨終をどのように捉え、死を見送ってきたかについて改めて考究したいと思う。仏教においては、生と死を分けて考える西洋思想とは異なっており、「生死一如(Jaimaranas)」(龍樹)と捉える。即ち、

生と死は分けることのできない表裏一枚のものであり、日常から死を自覚して主体的に生きるところに、生死輪廻の苦を超えぬ道があると説いている。法然や親鸞の中世の時代も、平安期以来、種々の往生伝が編纂されていることから考え

て、やはり日常より死が生の問題として見つめられていたと理解できよう。ここより私達は死を人生の終わりや敗北と見なさずに、自らの死を生の内に見透して、平生から死を訓練する精神を培ってゆくべきであろう。

それでは先ず、法然浄土教にいたるまでの臨終の問題を振り返ってみたい。日本仏教における死の看取りに多大な影響を与えたのは、善導の『臨終正念訣』の臨終行儀や『観念法門』に説かれている「入道場および看病人法用」である。そしてこれを承けて、源信は『往生要集』巻中末に善導の臨終行儀をそのまま引用し、厭離穢土という厳しい現世批判を通じて、浄土を忻求する仏道を明かした。またこの『往生要集』の思想に基づいて、寛和二年(九八六)五月には、比叡山横川の首楞嚴院の住僧二十五名が、二十五三昧会という仏教僧伽を結成し、これが臨終行儀の原型として後世に引き継がれ、やがて迎講として民衆の間に浸透していった。このよう

な源信浄土教における死の看取りは、日常の仏道修行から、臨終における臆病、そして葬送にいたるまで相互に援助し合うというもので、友の死を看取りながら、自己の死を見透して超えてゆこうとする運動であつたと考えられる。

次にこれが法然浄土教に移ると少し変容してくる。法然は臨終行儀や往生伝の流行した時代に生きているが、その臨終行儀を重んじる考え方と、臨終行儀に執られない考え方との二重の方向をもっていたようである。臨終行儀を重視する側面は、例えば「往生浄土用心」に「先徳たちのおしへにも、臨終の時に阿弥陀仏を西のかべに安置しまゐらせて、病者そのまへに西むきにふして、善知識に念仏をすゝめられようとこそ候へ。それこそあらまほしき事にて候へ。」と述べられており、源信の浄土教を継承している文言が見られる。また法然作と伝えられている『臨終行儀（臨終講式）』にも、臨終の心構えが記述され、後の浄土宗に影響を与えている。しかし一方、臨終行儀にこだわらず、平生の念仏を重視する側面も法然の思想の中に色濃く表われている。例えば「念仏往生要義抄」には、「問いていはく、撰取の益をかうぶる事は、平生か臨終かいかむ。答えていはく平生の時なり。」と説かれ、平生においてすでに撰取の利益を蒙ることを明かしている。また「正如房へつかわす御文」には、「ただのときによく／＼申しおきたる念仏によりて、仏は来迎したまふとき

に、正念には住すと申すべきにて候也。」とあり、平生において念仏を申しておけば、臨終には必ず来迎をえて、正念に住するとされている。さらに「浄土宗略抄」には、「もとより念仏を信せん人は、臨終の沙汰をはあなかにすへき様もなき事なり」とされ、臨終の姿の是非を論じたり裁いたりすべきではないと語っている。この死の姿によって人間の救いの是非を判断すべきではないという精神は、その門下の親鸞の思想に展開する深い意味をもっているだろう。そして実際に法然自身が死に臨んだ時の様子は、「御臨終の時門弟等に示される御詞」によれば、五色の糸を握って往生するという臨終行儀は、「つねの人の儀式」、つまり普通一般の人々の行う儀式であるといつて、法然自らは実行しなかつたと記録されている。その要因の一つには、当時の臨終行儀が次第に形骸化しはじめていた背景も考えられる。かくして法然は、従来の臨終行儀を容認しつつも、一方ではそれをそのまま踏襲せずに、臨終行儀の形式を自由化させたといえるだろう。そして源信までの浄土教においては、臨終正念ののち見仏、即ち臨終来迎を迎えることが仏道の理想とされ、その正念を保つために、いろいろな修道を積む必要があつたのに対し、法然はそれを一歩進めて、平生より念仏を申すことによつて必ず臨終来迎をえて、自然に臨終正念に住することができる

のみを取り繕う必要はなく、むしろ日常の念仏道に身を浸すことを大切にしていたと理解できよう。

さて、このように法然浄土教は二重の側面をもっていたが、その二つの臨終観は、後世の浄土教に二つの流れを産み出すことになる。一つは、弁長や良忠に流れてゆく、臨終行儀や死に様を大切にす精神であり、また一つは、親鸞にみられ、死の姿ではなしに死を抱えた生死全体を見きわめようとする精神であった。弁長や良忠における臨終重視の思想は、弁長の『臨終用心鈔』や良忠の『看病用心鈔』などに著わされ、その内容は『観無量寿經』の下々品、および善導の『観念法門』『臨終正念訣』、さらには法然作とされる『臨終行儀』に基づいて臨終看護の方法が書かれ、来迎をうるところに救いを求めている。それに対して、親鸞における平生重視の思想は、平生において信心体験を確立することを第一とし、死のプロセスの美醜について論じることにはなかつた。これを教える一通の乗信房に宛てた手紙が残っている。

「なによりも、こぞことし、老少男女おほくひとびとの死にあいて候らんこと、あはれに候へ。ただし生死無常のことはり、くはしく如来のときをかせおはしまして候へは、おどろきおぼしめすべからず候。まず善信が身には臨終の善悪をばまふさず、信心決定のひとは、うたがひなければ正定聚に住することにて候なり。さればこそ愚痴無知の人も、おはりめでたく候へ。」〔末燈

#### 鈔』第六通 真聖全二の六六四〜五)

この手紙の前年は飢饉や疫病で多くの同行が悶絶して死んでいったと推測されるが、親鸞がその死を「生死無常のことはり」として冷静に受容し、その上で信心決定の人は、臨終の姿の善し悪しを問う必要がないといった言葉は、友を看とった乗信房たちに大きな安らぎとなったに違いない。当時の往生観を破って、さまざまな死の姿を許し、苦しいままでも往生は間違いないと語ったところに、親鸞の人間に対する深い理解がうかがえる。かくして親鸞は究極的に、死の姿の善悪に集約して人間の真価を判断しなかつたのであり、平生において「生死をこえる道」を探し見いだすことをこそ主眼にしていたといえるだろう。

それでは、この臨終の善悪を問わない精神を生み出した思想的な背景を考えてみると、先ず第一には、法然浄土教にみられるように、臨終行儀から脱皮して平生の念仏を重視した精神を承けたからであろう。また第二には、それまでの浄土教が『観無量寿經』の下々品や『法華經』の読誦に基づいた臨終来迎の思想であったのに対し、親鸞の浄土教が『無量寿經』を中心とした平生業成の思想へと翻転したことも考えられよう。そして第三には、平安中期以降、隆盛をきわめた臨終行儀自体が次第に形骸化して、必ずしも見事に死んでゆけない問題が生じてきたのではないかと思われる。特に疫病や

飢饉などが続くと、貴族でもないかぎり、臨終の莊嚴を施すことは困難だったであろう。さらに第四には、間接的にはあるが、親鸞が先達としている教信婆弥の一人野辺で死んでいった姿勢に影響されるところがあったのではないかとも思われる。教信婆弥の生涯については『日本往生極楽記』や『今昔物語』等にわずかにみられるだけであるが、そこには暖かく見守られて死んでゆく思想ではなく、独り死しながら動物や自然に自らの命を捧げようとした思想がうかがわれ、この看死から独死への方向性を、親鸞や一遍も宿していただろうと推測されるのである。

最後に、親鸞が臨終をどのように捉えていたかを通して、死に際に執われなかった理由を別の角度から見直してみたい。親鸞において臨終の語は、およそ二つのケースに使われている。一つは、肉体的な死のこちら側、即ち人生の只中で体験される臨終である。例えば『愚禿鈔』に、「本願を信ずるは前念命終なり 即得往生は後念即生なり」と説かれるのは、本願に出遇い信心決定する時に、今までの日常的な自己に死して「仏となるべき身」へと誕生することを明かしている。したがってまた『末燈鈔』第一通には、

「真實信心の行人は、攝取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す。

このゆえに臨終まつことなし、來迎たのむことなし、信心さだまるとき往生またさだまるなり。」（真聖全二の六五六）

と記されているように、真實信心を決定した人間は、最早臨終來迎を待ち望む必要はなく、信心決定の時が臨終であると明かしたのである。したがって人生における宗教的な自己の確立を、臨終と捉えていたことがわかる。

しかし親鸞は、死に至るまでさるとはいわれない。肉体的な死の瞬間において、はじめて解脱をうるとされている。

『信巻』に「念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す」とあるのは、まさしくそのことを意味している。これがもう一つの、肉体的な死の瞬間における臨終と誕生である。そして『一念多念文意』には

『凡夫』といふは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおほく、いかりはらたち、そねみねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらずきえずたえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。」（真聖全二の六一八）

と記され、信心決定していても、仏の法鏡の中で、生涯残り続ける自己中心的な肉体的な煩悩がきびしく自覚されているのである。かくして親鸞が臨終の様相を問わなかったのは、基本的に、信心の決定する時点で臨終（宗教的な死）を体験し終っていたからであるが、それに加えて、臨終まで消えることのない人間の生への執着心、虚妄の深さを自覚していたから、見せかけの安楽な死に様に固執しようとしなかったと理解できるだろう。

（龍谷大学研究生）